# 若手教員が考える、教育者としての成長のおける「安心」の意義－教員として、省察をする機会を持つ―

○大河内敦子[1)]、森本　淳子[2)]、兒玉　善明[3)]、蔵本　　綾[4)]

1)帝京大学　医療技術学部　看護学科、
2)神奈川県立保健福祉大学　保健福祉学部　看護学科精神保健看護学領域、3)愛知県立大学　看護学部、
4)香川大学　医学部　看護学科

本ワークショップ企画代表者は、看護系大学での精神看護学教育とそれを担う若手教員の教育活動上の困難や求めている支援をテーマに研究を続けて参りました。また、当学術集会での若手教員向けの本ワークショップ企画は、これまでに6回ほど開催の実績を重ね、延べ100名を超える若手教員の皆様にご参加いただいております。昨年度からは参加者から企画メンバーに加わるなど、企画代表者自身が精神看護学の教員としてのキャリアを構築することと共に、このワークショップも少しずつ成長してきたように思い、そして、そのつど開催することの意義を振り返ってきました。

わたしたちは、この「振り返る」という時間を持つことを、ドナルド・A・ショーンのいう、「省察的実践」に重ねて考えています。精神看護学を担当する若手教員の教育活動の困難さについての論文（大河内、榊、三村，2022）では、困難さを感じる事象のひとつとして「事象に対する適切な言語化力の不足」すなわち精神看護学教員としての表現力の未熟さが挙げられています。これは、若手教員の多くが臨床で働く看護師から、ある日を境に教員となりますが、その際に看護師としての自分が暗黙知として行っていた行為や思考を、教育する者として言語化していくことへの難しさや不安を感じていることが明らかになったものです。しかしながら、たとえ苦痛で不快なことであったとしても専門職者、さらに教員としては欠かせない困難だと考えます。

ショーン（2007）は、「行為の中の省察（reflection-in-action）というプロセス全体が、実践者の状況のもつ不確実性や不安定さ、独自性、状況における価値観の葛藤に対応する際に用いる『わざ（art）』の中心部分を占めている」と述べています。つまり、教育活動におけるさまざまな不安を意識し、その不安を分解したり再構築したりしながら、教員としての「わざ（art）」を身につけるしかなく、もしかすると私たち教員は、どうやっても「安心」からスタートすることはできない存在なのではないでしょうか。

本ワークショップの目的は、参加者と企画者、参加者が共に精神看護学を担当する大学教員として成長していくことにあります。今回のワークショップでは、若手教員の皆さんが教育活動において、まだ形にならないような不安を感じながら、それでもさまざまな思考とともに、現在教員としておこなっていることを言葉にする時間を、企画者メンバーをファシリテーターとした小グループで話合い、そして、全体でも共有するようようなかたちで、それぞれが省察に取り組む時間となることを願っています。

今回もこれまで同様に、若手教員の方々、教員の教育に関心をお持ちの先生のご参加を心よりお待ちしています。

（参考文献等）

・ドナルド・A・ショーン.（2007）.省察的実践とは何かプロフェッショナルの行為と思考.鳳書房.
・大河内敦子,榊惠子,三村洋美.（2022）. 看護系大学で精神看護学を担当する若手教員の教育実践力支援に関する検討～若手教員の教育活動における困難と求めている支援に焦点を当てて～.昭和学士会雑誌,82（3）,205-224.